

黄表紙が描いた芋：滑稽イメージの利用

著者	藤田 智子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	14
ページ	257-279
発行年	2017-01-31
URL	http://doi.org/10.15002/00021312

黄表紙が描いた芋—滑稽イメージの利用

藤 田 智 子

はじめに

江戸で発生した絵入り読み物である草双紙の一つに、安永4(1775)年から文化3(1806)年に作られた黄表紙と呼ばれる作品群がある。それらの中には、タイトルに芋の名がつけられていたり、作中に単体の芋もしくは複数の芋が題材となって描かれていたりする作品が数多く存在する。棚橋正博著『黄表紙総覧』(1994)¹⁾によれば、角書を含めたタイトルに「芋」が含まれている作品は7作品、「薯蕷^{やまのいも}」も含めると8作品ある²⁾。

現在、日本人の食卓には里芋、山の芋、長芋、薩摩芋、じゃがいもなど数多くの芋が上がっている³⁾。その歴史は古く、平安時代(承平5年以前成立)の辞書である源順著『和名類聚抄』巻12には芋類の項目が立てられ、6種類の芋(芋、山芋、零余子^{むかこ}、薺^{ところ}、沢潟^{おもだか}、烏芋^{くわい})が列挙されている⁴⁾。江戸時代の始めに中国から琉球へと伝わり、その後薩摩国に伝来したという薩摩芋(甘薯)は、元禄10(1697)年刊行の『本朝食鑑』(人見必大著/12巻12冊)で確認できる⁵⁾。

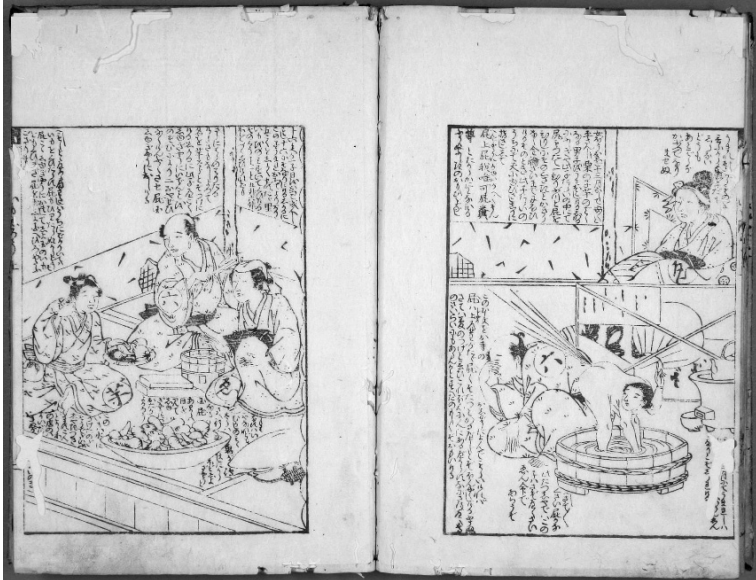
ところで、江戸時代に「芋」と一語でいう場合、その品種は里芋を指す⁶⁾。また辞書によれば、芋には食物本来の意味に加え、田舎者や野暮な人、無学な僧を指す芋掘り坊主、不器用な者などの意味がある⁷⁾。そのため、その意味を利用して作品が描かれた現象と言えなくもない。しかし、江戸時代に馴染みのある他の食品、例えば大根や南瓜なども芋同様に複数の意味をもっているが、それらを黄表紙の作品に利用する例は少なく、題名の比較からだけでも芋は他の食品と比較して群を抜いている⁸⁾。

文学史として黄表紙以前の草双紙である黒本青本の作品群には、「どらやきさつまいも」という芋を含んだ流行語の記載が確認できる⁹⁾。しかし、黒本青本の中には、黄表紙にみられたような「芋」を含んだタイトルや芋の挿絵、芋を題材にした場面は管見の限り皆無で、この「どらやきさつまいも」はあくまで甘味を象徴的にとらえた表現の利用に留まる。

本論では、黄表紙と芋の親和性に注視し、江戸の作者達による芋の描写から題材の在り方や表現方法を探り、芋を通じて黄表紙という文芸の性質の一面を明らかにしようとするものである¹⁰⁾。

1. 里芋と放屁

江戸時代、「おならをすること」は「^へ屁を^は放る」といい、この放屁と芋の関係性は当時みられた通念であった¹¹⁾。そこで特定される芋の品種は里芋で、現代において屁との関連が想定される薩摩芋とは異なっていた。黄表紙の作



【図1】『芋太郎屁日記咄』（一ウ二オ）

※図版 早稲田大学図書館古典籍総合データベースより

品には、この里芋と放屁の趣向を取り入れた物語が存在する。

安永7(1778)年に刊行された黄表紙『芋太郎屁日記咄』(恋川春町作画/2巻2冊10丁)は、その題名からすでに芋と放屁の結びつきが推量できる作品である(図1)¹²⁾。里芋ばかりを食べることから芋太郎と名づけられた主人公の、特技の屁芸を広める屁国修業を軸に物語が展開される。老夫婦から誕生する赤子の設定であったり、芋が桃のもじりとして扱われていたり、昔話「桃太郎」の要素が確認できる¹³⁾。

芋太郎は、実在していたとされる放屁の見世物芸人¹⁴⁾の出現が契機となって誕生する。当時の話題を取り込むことで、芋太郎と放屁の結びつきを出生についても強調したとみられる。安永3(1774)年刊行の風来山人(平賀源内)『放屁論』(2編2冊)には放屁が見世物芸であったことが書き留められ、天明前後の成立とみられる放屁の秘伝書『長生流屁法之巻』(卷子本)¹⁵⁾には、芸としての放屁のあり方やその奥深さが記され、これら書物の存在から放屁に対する当時の人々の関心を見出すことができる。

主人公芋太郎の父は芋うり十六兵衛として登場する。棒手振商人である父の扱う商品の、里芋1升の相場16文を込めた名であろう¹⁶⁾。さらに、芋太郎を妊娠していた時に、「十六文の里芋を五枡も食いし」(一オ)という母のおえごは、里芋のあくの強さを表す「えぐい」が訛った名であると指摘がなされ¹⁷⁾、これに倣うと両親の名は意図的に里芋に関連させて名づけたといえる。出生から芋太郎を里芋の申し子として印象づけ、芋の中でも里芋尽くし、という趣向の側面を示唆している。

芋太郎の誕生場面は、里芋が供される民俗行事である「十三夜の月見」をこじつけている(一ウ)。十月十日でなく十三月の妊娠期間を経て、小芋のような芋太郎が誕生する¹⁸⁾。挿絵には、産湯で放屁をする姿が描かれる。そして、少年になった芋太郎の名壺には「芋」と示され、大食するのは月見で供される里芋料理の衣被^{きぬがずき}¹⁹⁾である(二オ)。このように月見の設定から里芋を随所に出現することを可能にしている。

成長した芋太郎は、桃太郎が鬼の征伐に発つ調子さながらに屁国修業に旅立つ(二ウ)。「芋に銘じて祈」る願掛けは、胆を芋に置き換えた洒落である。そして、諸国遍歴の趣向を利用して、芋太郎は「芋総」(下総)、「芋つけ」(下野)、

「屁ちぜん」(越前)、「屁ちご」(越後)など芋や屁でもじった地名を巡る(二ウ)。舞台となる草津(現在の滋賀県南西部)も放屁の臭さを「草」の字に当て込んだ設定とみられる。しかし、古くから里芋尽くしの料理で一週間を過ごす民俗行事「甘酒祭り」²⁰⁾(別名「芋祭り」)が行われる芋ゆかりの土地でもあり、地方の伝聞も盛り込まれている可能性が窺える。この場面では「よく芋を食って屁を放る」芋太郎の噂が広まり、芋を貪り食う芋太郎の姿が見世物さながらに描かれる(三オ)。

大量の芋を食べた芋太郎の屁は、見物人を百済国^{ひやくさい}のもじりとみられる屁^{へくさい}臭国²¹⁾へ飛ばす。挿絵ではその動きが躍動的に描かれ、「このくさゝはどうだろう」という屁の臭いに触れた台詞が添えられ、滑稽さを増している(四ウ五オ)。この里芋による放屁を契機として、日本は屁臭国の王から珍しい貢ぎ物を得ることとなる。芋太郎はこのような外交上の功績を上げ、農夫の子から武士になる(九ウ十オ)。最後は、一連の話が屁のことばかりなので草(臭)双紙である、と臭いにかけた草双紙の由来が落ちになっている(十ウ)。

このように『芋太郎屁日記咄』は芋太郎の誕生、里芋の暴食、そして屁芸へと通じる出世譚である。芋の価格や味、民俗行事、見世物など当時の芋にまつわる話題を取り入れた芋尽くしの趣向とともに荒唐無稽な屁芸で笑いを誘う。挿絵の芋は、どれも一方が細くもう片方が丸みを帯びるという里芋独特の形状で描かれ、「芋」一語で里芋の品種を指していることが本文の記述とともに確認できる。

本作品は一見すると、屁のかもしだす可笑しさにのみ重きを置いているようにみえる。しかし、その屁を生み出す里芋そのものを全編にわたって隈なく描いており、笑いを表現する上で、芋の持つ滑稽なイメージが欠かせない要素になっていると推察できる。また、昔話「桃太郎」の翻案ながら、悪人の鬼は登場していない。鬼の不在を屁のインパクトと里芋の滑稽な存在感で補い、作品に一層の面白みを与えている。黄表紙だからこそ成立した芋と屁の妙味、とはいえないだろうか。

なお、芋太郎の名は、金目当てに鬼ヶ島へ向かう天明5(1785)年刊行の黄表紙『鬼通意嘘鳥物語』(録山人信鮎作・旭光画/3巻3冊)、放屁国で屁者^{きついうそしまのがたり}修業をする寛政8(1796)年刊行の黄表紙『諺下司話説』(山東京伝作・北尾^{ことわざげすのはなし})

重政画／3巻3冊15丁)でも確認できる。どちらも昔話「桃太郎」の翻案作品であり、前者は勘当される放蕩息子、後者は花咲男と名乗る屁芸の達人と、それぞれ滑稽の要素を伴った芋太郎像が描かれる。特に『諺下司話説』は芋と放屁の話題や地口が随所に散りばめられており、『芋太郎屁日記咄』の趣向と重なる部分が多く、本作の影響が見受けられる作品である。

2. 薩摩芋と女性

寛政元(1789)年刊行の料理書『甘藷百珍』(珍古樓主人著／1冊)²²⁾が当時繰り返し版を重ねていたとおり、薩摩芋は安価で旨く、庶民も食を楽しむようになった時代の食材の一つである²³⁾。中でも薩摩芋を好む女性の姿が黄表紙で取り上げられ、川柳では時代が下るが同様の構図を活用した作品がみられる²⁴⁾。文化元(1804)年刊行の黄表紙『<薩摩下芋兵衛／砂糖団子兵衛>五人切西瓜斬売』(山東京伝作、栄松斎長喜画／3巻3冊15丁)は、この薩摩芋を男性の主人公に仕立て、その女性関係を描いたものである(図2)²⁵⁾。

梗概は、大福餅公に仕え、犬猿の仲である薩摩下芋兵衛と砂糖団子兵衛の、菖蒲団子姫、さらには芸者桜煮の小万をめぐる恋の鞘当てである。登場人物は食べ物で統一され、「姿は全くの人間で頭上に元の姿を示す」擬人化の技法で描かれる²⁶⁾。題名の示すとおり、主人公が西瓜を頭と間違え五人斬りするところが見せ場となっている。これは、寛政7(1795)年初演(江戸)の歌舞伎『五大力恋緘』を下敷きにしたもので²⁷⁾、角書にみられる薩摩下芋兵衛、砂糖団子兵衛の両者の名は、その演目に登場する勝間源五郎、笹野三五兵衛の役名をもじったものであると指摘がなされている²⁸⁾。

冒頭において、主人公の薩摩下芋兵衛は「瘦形にて筋は多けれども、訥子²⁹⁾に似たる色男」と形容され、挿絵には細身で端正な顔立ちの男性が描かれる(一ウ二オ)。この筋ばった容姿を繊維質な薩摩芋の特徴になぞらえているのであろう。なお、この筋は他の黄表紙でも薩摩芋を特徴づける比喩表現として用いられている³⁰⁾。そして、菖蒲団子姫が薩摩下芋兵衛を想う背景が、当時の食べ物の薩摩芋を取り巻く状況に重ねられ本文で述べられる(二ウ)。



【図2】『五人切西瓜斬売』（一ウ二オ）

※図版 国立国会図書館デジタルコレクションより

さつまいも げび くひもの おも とうなす さつまいも
 薩摩芋といへば下卑た食物とばかり思へども、唐茄子³¹⁾、薩摩芋ときて
 は女中の好物にて、おさつなど、言はれて、至極女の最頂多き物なり。

このように薩摩芋は取るに足りない存在でありながら、女性はその甘味を好んでおさつと呼ぶほど好む、というその頃の薩摩芋に対する見方がみてとれる。また、薩摩芋の人気に呼応して、砂糖団子兵衛は薩摩下芋兵衛を妬んで「一山三文の青二オ」とけなしており、これは薩摩芋が安価であることを踏まえているのであろう。さらに薩摩下芋兵衛自身によって、

番太郎の見世で、土器^{かはらけ}に載せられ、砂まぶれになるとても厭^{いと}ひは致しませぬ。

と、番小屋で皿の上に並んで砂まみれになる焼き芋の様子が語られる。こういった安上がりで庶民的な薩摩芋を女性が好む、という構図は他の黄表紙で

も確認することができる。

例えば、天明6(1786)年刊行の黄表紙『手練偽なし』(四方山人(大田南畝)作・北尾政美画/1巻1冊5丁)では、花魁が「うでさつまいも、いつそ、うまうおざんす」と言い、茶屋への道中に薩摩芋を頬張る姿がみられる(三ウ)³²。偽りのない本音を語るといふ趣向の中で、花魁という位の高い遊女と下等にみられる薩摩芋の組み合わせが笑いの対象となっている。

寛政3(1791)年刊行の黄表紙『<京伝勸請新神名帳>八百万両金神花』(山東京伝作・北尾政美画/3巻3冊15丁)は、働き者であった女房に疫病神が憑き、怠惰になった女性の姿が描かれる³³。落ちぶれた状況下でもその女性が竈の前で薩摩芋を焼き、匂いの魅力に触れる台詞があり面白さを増している。

また、寛政6(1794)年刊行の黄表紙『<夫は水虎/是は野狐>根無草筆苳』(山東京伝作・北尾重政画/3巻3冊15丁)は、主従関係による女性の嗜好の相違を描写している³⁴。「お内儀、餅を好めば、下女も薩摩芋を嗜むの道理」(六ウ)と、下女が薩摩芋との組み合わせであることが分かる。

これらの作品を通じて、薩摩芋と女性の関わり合いが黄表紙の中で繰り返しみられること、女性の身分や性格を描くために薩摩芋の野暮ったさを重ねて利用していることが確認できる。薩摩芋によって女性を巻き込んだ滑稽表現が登場し、黄表紙らしさにつながっているといえよう。

『五人切西瓜斬売』の最後は、薩摩下芋兵衛が砂糖団子兵衛に打ち勝ち、菖蒲団子姫を妻とし、たくさんの小芋を授かってめでたく終わる(十五ウ)。このように、『五人切西瓜斬売』は、食べ物尽くしの趣向の中で主役に抜擢された薩摩芋を安価で下卑たもののだとしながらも色男として擬人化し、女性の注目を集める存在として描いていた。また一連の黄表紙において薩摩芋は女性とつながりを持っており、貴賤を問わず女性が薩摩芋に目がないことが笑いの対象になるという、黄表紙ならではの表現が確認できた。女性と薩摩芋が結びつくというこの感覚は、現代の我々まで通じているところである。

ここまで、『芋太郎屁日記咄』の芋太郎と『五人切西瓜斬売』の薩摩下芋兵衛という、ともに芋の擬人化をした主人公の物語について論じてきた。放屁とのつながりや独特の滑稽性を備えた里芋の芋太郎に対し、女性と関わりを持つ薩摩下芋兵衛との間には、同じ芋でありつつも黄表紙表現における共通

性はみられなかった。

3. 山の芋と鰻

現在では「山芋」という表記が一般的であるが、江戸時代は山の芋と呼ばれていた。寛政元（1789）年刊行の黄表紙『<高^{たかいも}芋／卑^{ひくいも}芋>芋世中』（内新作、烏文斎栄之画／2巻2冊10丁）³⁵⁾は、里芋の主人公に対峙する、山の芋の振る舞いが見どころの物語である（図3）。題名に「芋世中」とあるとおり、13種類もの芋の登場によりその世界が構築されている。登場人物の頭上にそれぞれの芋が載り、「姿は人間・頭上に正体を示す」擬人化の技法³⁶⁾がみられる。ここでは、山の芋についての描写や表現方法を探るとともに、登場する多様な芋の相対的な位置づけを確認するものである。

主人公は、里芋の一口である（一ウニオ）。「里芋と言えは野暮のように聞こゆれどとんだ手のある芋男」と、色男をもじる「芋男」と呼び、好人物に描いている。さらに父「大の芋助」は、「どこの畠に行っても芋頭に立てられ」と、親芋になぞらえた人格者の設定である。一方、山の芋は物語の主要な位置づけで出番が多いにもかかわらず、「山の芋」という本来の品種による呼称のままで、里芋にみられたような挿話もない。里芋が主人公とはいえ、里芋と山の芋の両者の取り上げ方には大きな差がみられる。

冒頭、この里芋親子と山の芋の3人が、「十五夜の月見（別名芋名月）」で席を囲む。先述した『芋太郎屁日記咄』においても里芋に関連させた十三夜の月見（別名栗又は豆名月）の場面がみられたが、ここでは芋が芋名月を祝うという諧謔を描いたとみえる。出される料理は薯蕷^{とろろ}汁、山かけ豆腐、芋飯、芋酒という芋尽くしとなっており、ここでも芋が芋を食べるといふ可笑しさが描かれる。日常の料理を扱った寛永20（1643）年刊行の料理書『料理物語』（作者未詳／1巻1冊）³⁷⁾には、大根や茄子などとともに山の芋や里芋が並び、江戸初期から食材として芋が常用されていたことが確認できる。作品にみえるこれらの芋料理は、この版本に登場する一般的な料理である³⁸⁾。

そして、山の芋は里芋の芸者お里に「足をつけ」て連日通う（二ウ三オ）。尾行する姿をとらえた描写であるが、諺「山の芋で足を衝く」³⁹⁾を踏まえた

可能性がある。不注意から思いもよらない失敗をするたとえ（『日国』）が、山の芋の顛末を暗示するものととれるためである。

さて、土芋⁴⁰⁾の告げ口から一口とお里の仲を知った山の芋は、一口を打ち倒す計画を立てる（四ウ）。山の芋は、「一口と言ふ奴は芋師屋の娘とも芋事をしやあがつた。芋々しい奴よ」と、鋳物師屋、秘め事、忌々しいをそれぞれ芋でもじった文句を並べる。そして、固くて食べられない芋の意である石芋を仲間へ誘う。さらに、諺「長い物にはまかれろ」を踏まえた「長芋には巻かれろ」⁴¹⁾と洒落て、挿絵から明らかに年長者とみえる長芋に協力を頼む（五オ）。長芋は嫌々ながら「芋々」と、承諾をいう「うむうむ」のもじりでうなづく。このように芋を絡めた巧みな表現が続き、手が込んでいる。

場面は替わり、遊郭通いの二日酔いを理由に芋粥をすする薩摩芋と唐の芋が登場する。二人は、一連のお里をめぐる恋の鞘当てを野暮と見下して、悠然と高みの見物をする風情である（五ウ）。里芋と山の芋の対立が見どころの物語であるが、薩摩芋と唐の芋はどちらにも加担せず、別格の存在として扱われていることが確認できる。

一口はお里との仲が親に見立てた親芋から許されず、下妻しもつま（現在の茨城県下妻市）をもじった「芋妻」へ駆け落ちをする（六オ）。頼る先は、僧侶を揶揄する意の「芋堀坊主」のもとのである。一方の山の芋は、お里の母である根芋に会う（六ウ七オ）。根芋が里芋の親芋の芽である（『日国』）ことに由来した配役であろう。山の芋は、この根芋を通じて一口とお里の駆け落ちを知り、追って川へ飛びこむ。川の中で山の芋は、長さが一尋という黒くて長い筋へと変わり、最終的には鰻の姿に変わる（七ウ八オ）。歌舞伎の道成寺物にみられる、蛇体が日高川を渡る姿に重なっているのが⁴²⁾、ここでは「山の芋が鰻になる」変化が見せ場になっている。この「山の芋が鰻になる」とは、天明6（1786）年自序の辞書『譬喩尽並ニ古語名数』（松葉軒東井編）にみえる諺の一つである⁴³⁾。物事が突然意外なものに変化することを表し、作品では顔面通りの展開をみせている。

さらに山の芋が鰻になることは、実は当時の俗信でもあった。正徳2（1712）年自序の事典『和漢三才図会』巻第102には、薯蕷が山薬やまのいもとして気力を益したり、下痢を治したりする薬効が述べられている。そこに、



【図3】『芋世中』（七ウ八オ）

※図版 国立国会図書館デジタルコレクションより

薯蕷^{たに}溪^{ほとり}ノ^{ハシ}辺ニ端ヲ出シ時々風水ニ感シテ則チ鰻ニ変ズ。半変ノ者ヲ見ル人往々有り。

と、薯蕷が時々鰻に変化すること、半分鰻に化けた状態を見た人がいることが明記されている⁴⁴⁾。横恋慕する山の芋が突然鰻に変わる、という唐突に見える展開ではあるが、俗信の流布を背景として成り立ったとみえ⁴⁵⁾、当時ならば起こりうる出来事なのである。

例えば、寛政9（1797）年刊行の黄表紙『薯蕷鰻鱺菓^{やまのいもうなぎくすり}』（十返舎一九作画／2巻2冊10丁）は題名からこの俗信を題材にしていることがわかる。昔話『舌切雀』を下敷き^うに雀を鶺鴒に代えた翻案作品で、山の芋を鰻に変える鶺鴒の技を見た鶺鴒が悪巧みをして山の芋を盗む話である。山の芋を鰻に変えることを秘法として扱ひ、鶺鴒が芋俵のままの山の芋を川に浸して鰻に変え、一度も荷を解かずに出荷するという大胆な発想が黄表紙らしい。

また、寛政3（1791）年刊行の黄表紙『世上洒落見絵図^{よのなかじやれけんのえず}』（山東京伝作・菊

亭主人（山東京伝）画／3巻3冊15）⁴⁶⁾では、店の看板に鰻が山の芋の変化でできることを踏まえ、「江戸もの／山の芋かばやき」の文字がみえる。山の芋が鰻に変わる前に早まって山の芋を調理してしまうという滑稽さが描かれる（八ウ九オ）。

享和3（1803）年刊行の黄表紙『不廚庖即席料理』（時太郎可候（葛飾北斎）作・画／3巻3冊15丁）では、長芋の台詞に「こうぬらくらして居ては半分うなぎ鰻はんぶんになったようなものだ。」（六ウ七オ）とある⁴⁷⁾。山の芋が長芋に置き換えられてはいるが、芋が鰻に変化することに触れた台詞である。これらの黄表紙を通じて、山の芋が鰻に変わる俗信をストーリーに取り込むことは黄表紙における一つの趣向になっていることがわかる。

『芋世中』の最後では、山の芋が変化した鰻に対し、一口らを匿う芋堀坊主が火箸を手裏剣に見立てて鰻の喉を刺し、しとめる。これは、鰻を捌く際に喉元に目打ちをする調理方法をなぞらえた振る舞いで可笑しみを誘っている。山の芋の死により、一口とお里は結ばれ、二人は鰻の蒲焼と芋田楽の商売を始める。子どもは、山の芋の因縁か山の芋の珠芽をいう「零余子」である（九ウ十オ）。

以上のように『芋世中』は、13種類の芋によって物語の世界が構成されている。芋の代名詞であった里芋を中心に据え、山の芋は敵役、土芋はその手下、長芋は年長者、薩摩芋と唐の芋は楽隠居、根芋は親、零余子は子どもというように芋にキャラクター性を見出して相応の役を与えている。ただ、嫉妬深くて気の荒い、完全な悪者として描かれている山の芋には、食材として特徴的な部分は窺われない。むしろ、俗信「山の芋が鰻になる」を最大限に利用して、その変化を化け物⁴⁸⁾のように描くことで、作品に面白味を加えているのである。

また、多種多様な芋が登場するという事は、読者も芋の差異をおおよそ理解していることが前提となっていよう。そこには、単に品種を指すだけでない当時の芋に対する通念も含まれる。例えば、出来不出来を表す芋の呼称である石芋は、品種と同列に扱われている。この石芋を含め、13種類の芋が登場する本作の存在は、当時の人々の芋への馴染み深さを物語っているのである。

このように、芋は食材としてだけではなく民俗行事や俗信などといった人の

生活と関わりを持っており、それが作品に反映されていることが確認できた。芋を取り込むことは、結果として付随する逸話を持ち込むことであり、芋が作品の中でいくつもの役割を果たすことが可能となって芋の尽くしものが成立したのである。

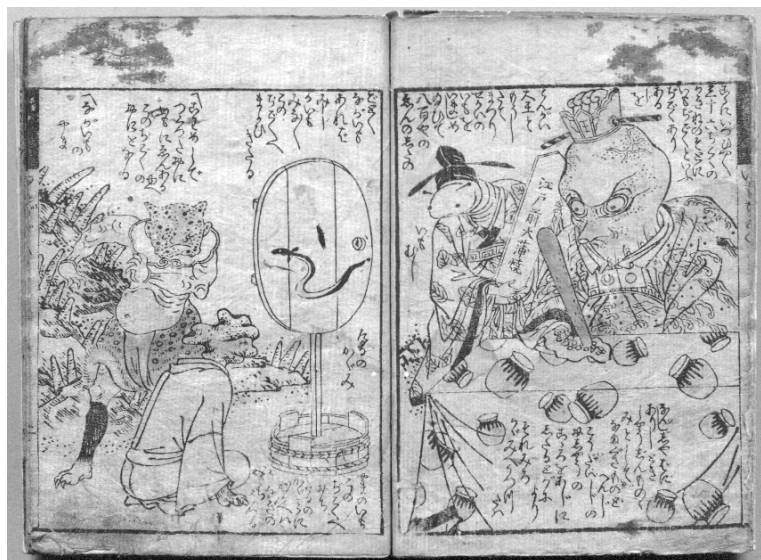
4. 里芋と蛸

前段において、芋自体が黄表紙の趣向として位置づけられる可能性を示唆した。寛政元（1789）年に刊行された黄表紙『いつびやくさんじやういもじこく一百三升芋地獄』（山東京伝作・北尾政演画／2巻2冊10丁）⁴⁹⁾は、山芋、長芋をはじめ12種類もの多様な芋が登場するという、こちらも芋尽くしの作品である（図4）⁵⁰⁾。前述した『芋世中』と刊行年を同じくし、取り上げる芋の品種が多いという共通点がみられるが、場面ごとに中心となる芋が異なる、という作品構成になっている。従って、場面を見比べることによって芋の品種による差異に触れることのできる作品である。

タイトルの「一百三升」は、大小で136あるという地獄の数⁵¹⁾「一百三十六地獄」を芋の目方にもじったもので、小林朝比奈⁵²⁾が主人公としてその芋地獄を巡る、という設定である。しかし、実際の主役は場面ごとに異なる芋である。挿絵には顔の形や髪型に芋の特徴を備えた、人間のような姿が描かれる。擬人化の技法に照らすと、「顔が人間以外・体が人間」⁵³⁾に該当する。

冒頭、地獄の入り口で山の芋が生前の善悪を映すという浄玻璃の鏡に向かい、白装束の姿で描かれている（一ウ二オ）。背景には、地獄でいうところの針の山を模した、長芋の山がみえる。芋尽くしの一方で、罪を裁く閻魔大王は蛸の容姿である。実は、江戸時代、蛸は夜に畑へ行き、里芋を掘って食べる、という俗信があった⁵⁴⁾。蛸の登場はそれに基づいたもので、蛸と里芋という組み合わせの面白さから利用されたのであろう。

天明5（1785）年刊行の黄表紙『たごのうどうつくだのをき蛸入道 佃沖』（朋誠堂喜三二作・喜多川歌磨画／1冊5丁）は、海で漁師の胆を食べてしまう大蛸に対し、薬師如来が胆の代わりに芋を勧め、蛸が里芋を食べるようになったというその俗信の由来を伝える話である⁵⁵⁾。胆は芋のもじりとみえる。



【図4】『一百三升芋地獄』（一ウ二オ）

※図版 国立国会図書館デジタルコレクションより

寛政3（1791）年刊行の黄表紙『^{たつのみやこせんたくばなし}竜宮洗濯噺／^{いまたこ}芋鯖の由来』（^{ゆらい}勝川春朗画／2巻2冊10丁）は、作中の料理を通じて芋と蛸の関係に触れている。芋は、里芋の一種である唐の芋となっており、竜宮という舞台に合わせ、「唐」の示す異国情味のイメージを利用したとみえる。

また、寛政12（1800）年刊行の黄表紙『^{しんがくもたこじる}心学芋蛸汁』（十返舎一九作・画／3巻3冊15丁）は、蛸と、蛸に吸い殺された里芋の親子の因縁を描いた作品である。こちらにも芋蛸汁という料理の屋台店が登場し、一貫して芋と蛸が主題となっている。これらの作品を通じて、里芋と蛸の組み合わせが黄表紙の題材の一つとして機能しているといえる。

『一百三升芋地獄』に戻ろう。唐の芋は鬼達によって茹でられ、塩を添えて食べられるという責めにあっている（二ウ三オ）。地獄でいう、釜ゆでの刑である。鬼に対する「お前は、芋の煮へたも知らんすまひ」という唐の芋の捨て台詞は、芋の煮え具合が判断できないほど世間への疎さを揶揄する諺⁵⁶⁾を踏まえたもので、その状況を自らが再現するという穿った可笑しさが挿絵と

ともに描かれる。

薩摩芋は、罪の重さを計るため、鬼に竿秤^{さおばかり}で重さをはかられる、という責めにあっている（三ウ四オ）。「この地獄では夏になると団扇を商うなり」と、夏は団扇、冬は薩摩芋を売る当時の問屋街である堀江町（現在の中央区日本橋小舟町のあたり）の様子について触れ⁵⁷⁾、「堀江町地獄」と名づけている。また、番小屋で素焼きの皿に載せ売られるという当時の商習慣⁵⁸⁾を「番太郎が所で、土器の上に置かれるにはあやまります。」と、薩摩芋自らが述べる滑稽さがみられる。

死んだ子どもが小石を積んで塔を作るという賽河原^{さいのかわら}⁵⁹⁾の地獄では、河原を芋畑に移し、子どもを小芋、小石を零余子^{むかご}に代えて描く（四ウ五オ）。地蔵の台詞に「中の丁の土用見舞ひにつかはせるぞ」とあり、これは遊郭吉原で暑中見舞の手土産に小芋を使う習慣を持ち出したものである⁶⁰⁾。地蔵や子どもと、遊里のイメージの落差もまた面白みの一つとなっている。

そのほか、とろろ地獄では、鬼によってわさびおろしで下ろされ、播鉢ですられているつくね芋が描かれる（五ウ）。皮つきの里芋をいう衣被^{きぬかずき}の芋は、三途河の婆様に皮を剥がされるという責めに遭う（六オ）。冥土にある三途の川で奪衣婆が衣服を剥ぎ取るという俗信を芋の皮に見立てているのである⁶¹⁾。これら下ろすや播る、剥がすという鬼の責めは、本来ならば然るべき芋の調理法である。それを受ける芋の苦渋の表情が笑いにつながっている。

罪人^{ひのくるま}を火車に乗せて運ぶ火車地獄⁶²⁾では、里芋が尻の車に乗せられて、堪え難い匂いを嗅がされるという責めにあう（六ウ七オ）。挿絵には、着物を捲し上げた尻の形をした車輪とそこから放射状に尻が出る様子が描かれ、その世界観は先述した里芋と放屁の趣向を取り入れたものである。また、畜生道^{ちくしやう}の地獄では、親芋の母と小芋の息子が親子で串刺しの責めにあっている（七ウ八オ）。親子の間柄で性交する意味を持つ「芋刺し」を体現し、咎めたものとみえる。

血池^{ちのいけ}地獄に見立てた蓮芋池^{はすいものいけ}地獄は、固い芋を指す石芋と弘法大師伝説⁶³⁾の関係を取材した場面となっている（八ウ九オ）。諺「弘法も筆^{こうぼう}の誤り^{ふで}」⁶⁴⁾になぞらえた「弘法にも茹での誤り」と石芋の固さを茹で加減の失敗と茶化し、極楽浄土を願う「南無阿弥陀仏」に対する「芋阿弥陀仏^{いもあみだぶつ}」のもじりを添えて可

笑しみを誘っている。

本作は、このように芋の種類異なる九つの地獄が描かれる。芋は擬人化され、作者は、芋の種類に応じて地獄を使い分け、滑稽性を備えた虚構の中で当時の俗信や風俗に絡めて独特の世界観を作っていた。黄表紙を舞台とした上で、芋にまつわる多様な伝聞や諺、芋への馴染み深さが、この非現実的で畏怖の対象となる地獄を可笑しみに変えたのであろう。

まとめ

本稿では、芋の描写を分析するため、芋の表現がみられる黄表紙作品4点を中心に論じ、付随して13点を取り上げた⁶⁵⁾。作品により芋が登場する割合や芋の取り上げ方は異なるものの、芋という語句や芋に関する表現の含まれる作品が実際には40点以上見出される。それらの作品の傾向として、作者や刊行時期の偏りは特段見受けられず、黄表紙時代およそ30年間にわたって作者達が手頃な題材の一つとして芋をさかんに取り上げる、という興味深い現象がみられた。

まず、『芋太郎屁日記咄』では、主人公が芋太郎と名付けられ、里芋自体の存在とともに里芋が屁と結び付いた面白さを描いたものであった。屁に面白みを感じる感覚は現代の我々にも理解でき、その屁のイメージが戯作と親和性を持つことは予測可能なことである。しかし、作品ではそれ以上に芋の持つ特性を糸口として巧みに笑いへと変えて、利用していることを確かめた。

一方、同じ芋が主人公である『五人切西瓜斬売』は、その甘さによって女性に好まれる薩摩芋という当時の状況を物語に重ね、名に薩摩芋の文字が入る主人公が登場し、色男としてふるまう姿がみられた。また、薩摩芋と女性が結びつく滑稽表現の利用が確認できた。

『芋世中』では、擬人化された13種類もの芋が人間の社会さながらの振る舞いをして笑いを誘い、山の芋が鰻になるという俗信を利用し、奇想天外な展開を見せていた。現代の我々以上に当時の人々は芋の種類やそのそれぞれに付随するエピソードを認識していたことが読み取れ、このことが芋尽くしの趣向を生み出す要因となったといえる。

『一百三升芋地獄』では、場面ごとに異なった芋が登場し、それぞれの芋に関する逸話を最大限に利用しながら地獄の一場面を滑稽に描き出していた。芋が挿絵によって描き分けられることに加え、当時の芋の呼称の豊富さも芋尽くしの趣向に欠かせない要素であったといえる。またここでは、蛸が里芋を好んで食べるという俗信が利用され、他の黄表紙にもこの取り合わせがいくつもみられた。

これらの作品を通じて、現代の私たちの想像する枠内に収まりきれない当時の芋の文化の広がりによる黄表紙表現を確認した。各作品には、味覚や嗜好、価格や商習慣、俗信や諺、品種や産地、民俗行事、料理といった当時の多様な芋文化が盛り込まれていた。ここから生まれる芋の黄表紙表現の幅もまた非常に広いものであった。

このような芋文化の存在を背景として、芋の持つ滑稽なイメージが登場し、芋を黄表紙の滑稽表現の材料に用いていた。また、挿絵のある黄表紙は、本や化物、流行語などの尽くしものの趣向がよく知られている⁶⁶⁾。同様の趣向として、芋を擬人化による尽くしものの素材に利用し、黄表紙ならではの笑いの源としていったのであろう。

この黄表紙と芋の親和性が、芋と他の食品との差異であったといえる。芋を描いた黄表紙作品のあり方やその数から、作者や読者達の感覚の中に芋が黄表紙の異類物の一つのカテゴリーになりうるほどの多様な文化を備え、広がりを持つ存在であった、とはいえないだろうか。

註

- 1) 棚橋正博 1986-1989『黄表紙総覧』全5巻 青裳堂書店
- 2) 安政7(1778)年刊行『芋太郎罷日記咄』(恋川春町作画)、天明4(1784)年刊行『<生徳芋助／見徳夢助>寿御夢想妙業』(古阿三蝶作画)、寛政元(1789)年刊行『一百三升芋地獄』(山東京伝作、北尾政演)、寛政元(1789)年刊行『<高芋／卑芋>芋世中』(内新好作、鳥文齋栄之画)、寛政3(1791)年刊行『竜宮洗濯噺／芋鮎の由来』(勝川春朗画)、寛政9(1797)年刊行『薯蕷鰻鱺菜』(十返舎一九作画)、寛政12(1800)年刊行『心学芋蛸汁』(十返舎一九作画)、文化元(1804)年刊行『<薩摩下芋兵衛／砂糖団子兵衛>五人切西瓜斬売』(山東京伝作、栄松齋長喜画)の8作品である。
- 3) 植物名の表記は一般にカタカナであるが、本稿では文学作品の要素であるため、芋

- の表記は漢字に統一する。なお、じゃがいもは明治期からの栽培品種。
- 4) 図版は国立国会図書館所蔵本（デジタルコレクション掲載 <http://dl.ndl.go.jp/> 最終閲覧 2014.11.17）
 - 5) 島田勇雄訳註 1976『本朝食鑑』東洋文庫 全5巻 平凡社
 - 6) 前田勇編 1974『江戸語大辞典』講談社には「里芋」、大久保忠国・木下和子編 2014『江戸語辞典』（新装普及版）東京堂出版には「浅草の西の町で売った唐芋」とある。唐芋とは里芋の一種。なお、本稿での芋の表記は、里芋ではなく芋類全般のことを指す。
 - 7) 日本国語大辞典第二版編集委員会 2000『日本国語大辞典 第二版』小学館（以下『日国』）、中村幸彦等編 1982『角川古語大辞典』角川書店
 - 8) 「大根」を含むタイトルの作品はなく、大根の千六本をもじった天明5（1785）年刊行の芝全作『＜御手料理／御知而已＞大悲千禄本』が唯一の作品である。「南瓜」を含む作品は、寛政9（1797）年刊行の十返舎一九作画『余諺東埔築掌』の1作品、小型の南瓜である「唐茄子」を含む作品は、見当たらない。
 - 9) 松原哲子 1998「草双紙における流行語の位置」『近世文芸』68号 pp.49-62
 - 10) 芋と黄表紙を論じた先行研究は見当たらない。ただし、文学作品から当時の生活実態を考察した、衛藤君代 1994「化政期の文学や挿絵に表れた江戸の食」『論集江戸の食—くらしを通して』弘文出版（pp.136-155）に薩摩芋の事例がみられる。黄表紙とお菓子の関係を論じた鈴木俊幸 2006「黄表紙の中のお菓子たち」『和菓子』第13号は、目を慰めるもの、口を慰めるものと両者を位置づけ、その親和性を指摘する。また、渡辺信一郎 1996『江戸川柳飲食事典』東京堂出版によると、様々な芋が川柳の題材となっていることがわかる。
 - 11) 川柳に「芋べい食つて尻べい放る村月見」（天保9～11（1838～1840）年 158篇）と、放屁と芋を題材にした作品がみられる（岡田甫校訂 1978『俳風柳多留全集』12巻 p.149 三省堂所収）
 - 12) 図版は早稲田大学所蔵本（古典籍総合データベース掲載 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/> 最終閲覧 2015.11.08）、翻刻及び注釈は中村正明 2014「黄表紙『芋太郎尻日記断』翻刻と注釈」『渋谷近世 国学院大学近世文学会会報』第20号 pp.91-107を参考にした。
 - 13) 滑川道夫 1981『桃太郎像の変容』東京書籍によると、室町末期から江戸初期に桃太郎が成立して以降、時代に応じて様々な桃太郎像が描かれ、黄表紙の桃太郎像は、軟派なものが多いとしている。
 - 14) 斎藤月岑著 喜多村筠庭補筆 嘉永2-3（1849-1850）年刊行『武江年表』安永3年の項に、「両国に放屁男、見世物に出。霧降咲男と云、大評判。」とある（今井金吾校訂 2003『武江年表』筑摩書房 p.55 参照）。
 - 15) 塩村耕 2000「屁文学の系譜」『江戸の文事』ぺりかん社 pp.483-503
 - 16) 小柳津信郎 2006『近世賃金物価史史料』成工社出版部によると、里芋の価格を宝暦

- 5 (1755) 年は 20 文、安永 3 (1774) 年は 18 文としている。
- 17) 中村正明 2014 「黄表紙『芋太郎屁日記咄』翻刻と注釈』『澁谷近世 國學院大學近世文学学会報』第 20 号國學院大學近世文学会 pp.91-107
- 18) 註 17 の中村氏は、13 という数が放屁の芸「梯子屁はしこべ」の数に因んでもいるとする。
- 19) 里芋を皮つきのまま茹でて、手で剥きながら食す調理方法のこと。
- 20) 滋賀の食事文化研究会編 2006 『芋と近江のくらし』サンライズ出版
- 21) 註 17 の中村氏の指摘による。
- 22) 吉井始子翻刻代表 1978-81 『翻刻 江戸時代料理本集成』臨川書店 5 巻 pp.277-297、別巻 p.264
- 23) 薩摩芋の伝来は様々な伝承が残るが、江戸に持ち込まれた正式な記録は享保 19 (1734) 年である (井上浩 2010 「さつまいもをめぐる文化」『サツマイモ事典』全国農村教育協会 pp.275-280 参照)。
- 24) 川柳「おさつとて焼芋をすく下女でなし」(天保 2 (1831) 年百十三篇)、「もっと入れなと下女が買う薩摩芋」(天保 4 (1833) 年 124 別篇)がある (岡田甫 1978 『諷風柳多留全集』9 巻 三省堂所収)。
- 25) 図版は早稲田大学所蔵本 (古典籍総合データベース掲載 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/> 最終閲覧 2015.11.08) を用い、翻刻は水野稔編・棚橋正博校訂 2009 『山東京伝全集』第 5 巻を参考にした。
- 26) 木戸聖子・広部俊也 2004 「黄表紙の擬人化技法と「見立て」」『国語国文学会誌』46 新潟大学人文学部国語国分学会 pp.1-15
- 27) 薩摩侍が大坂で私娼菊野を殺した五人斬り事件を題材とする (服部幸雄・富田鉄之助・廣末保 2011 『新版 歌舞伎事典』平凡社 pp.191-192 参照)。
- 28) 註 1 参照
- 29) 『五大力恋緘』初演に登場した 歌舞伎役者沢村宗十郎 (3 代目) の俳名をいう。薩摩下芋兵衛は彼の風貌に似せた可能性が高い (井原敏郎 1960 『歌舞伎年表』第 5 巻 岩波書店参照)
- 30) 寛政 3 (1791) 年刊行の黄表紙『<悪魂後編>人間一生 胸算用』(山東京伝作・画 / 3 巻 3 冊 15 丁) では、「こ、らは筋が多くて歩きにくい。薩摩芋にすると、一向だ」と、足元の悪さが薩摩芋の筋ならば良かったと悔やむ主人公の台詞がみられる。寛政 5 (1793) 年刊行の黄表紙『<煩惱即席 / 菩提料理>四人詰南片傀儡』(山東京伝作・北尾重政画 / 3 巻 3 冊 15 丁) では、「その薩摩芋の筋に心が引かされやすよ」と、薩摩芋の筋に惹かれる小僧が登場する (十二オ)。薩摩芋の筋を好意的に表現しており、筋も薩摩芋の魅力の一つと推察できる。
- 31) 前田勇編 2003 『江戸語大辞典 (新装版)』小学館によると、南瓜よりも美味で女性を罵る意の「唐茄子食い」は、唐茄子を女性が好むことに由来するという。
- 32) 浜田義一郎編集代表 1986 『大田南畝全集』岩波書店 7 巻 p.412
- 33) 水野稔編 1993 『山東京伝全集』ぺりかん社 2 巻 p.457

- 34) 水野稔編 2001 『山東京伝全集』ペリかん社 3巻 p.508
- 35) 図版は東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本を用い、翻刻及び注釈は、杉村紀子 2009 「黄表紙『高芋卓芋芋世中』について』『叢』30号東京学芸大学 pp.196-221を参考にした。
- 36) 註26参照
- 37) 吉井始子翻刻代表 1978-81 『翻刻 江戸時代料理本集成』臨川書店 1巻 p10
- 38) 山の芋料理の一つであるとろろ汁が時期や作風の異なる黄表紙に登場する。寛政3(1791)年刊行の黄表紙『<悪魂後編>人間一生胸算用（にんげんいちしやうむなざんよう）』（山東京伝作・画/3巻3冊15丁）には、「はい／＼、かしこまりのとろろ汁さ」（十四ウ）と、「かしこまり」に丸子宿（まりこ）（現在の静岡県静岡市）の言葉を掛け、その名物であったとろろ汁を出す洒落がみえる（註33に同じ）。また昔話『かちかち山』に倣った、寛政9(1797)年刊行の黄表紙『閑思歎堺界』（かち／＼やまけだものせかい）（十返舎一九作画/2巻2冊15丁）38には、狸を捕まえた猪が狸汁ではなくとろろ汁にしてはどうか、という台詞がみられる（鈴木利平編 1901 『黄表紙百種』（続帝国文庫）博文館）。
- 39) 太田全斎編 寛政9(1797)年序『諺苑』（げんえん）（山田忠雄監修 1966 『春風館本 諺苑』新生社 p.134所収）
- 40) 正徳2(1712)年自序の事典『和漢三才図会』（寺島良安著）によると、土芋は「ほど」と読み、マメ科で地中の根を食す塊芋（ほと）とみられる（図版は国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/> を参照）。
- 41) 太田全斎編 寛政9(1797)年序『諺苑』（げんえん）（山田忠雄監修 1966 『春風館本 諺苑』新生社 p.108所収）
- 42) 道成寺説話を基にした歌舞伎舞踊と人形浄瑠璃・歌舞伎狂言で演じられる一系統で、宝暦3(1753)年初演の江戸中村座『京鹿子娘道成寺』を基本に、以降多種多様な道成寺が演じられた（富澤慶秀監修 2012 『最新歌舞伎大事典』柏書房、服部幸雄ほか編 2011 『新版歌舞伎事典』平凡社参照）。天明7(1787)年の芝居番付（江戸・森田座）には、『花形見娘道成寺』の名が確認できる（早稲田大学演劇博物館デジタル・アーカイブ・コレクション「近世芝居番付」データベース <http://www.waseda.jp/enpaku/> 最終閲覧日 2015/12/8 参照）。
- 43) 翻刻は、宗政五十緒編『譬喩尽並ニ古語名数』1979 同朋舎を参照
- 44) 図版は国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/> 最終閲覧日 2015/11/24 を参照
- 45) 川柳にも、「山のいもうなぎに化る法事をし」（明和2(1765)年初篇15）など山の芋と鰻を題材にした作品がある（山澤英雄校訂 1995 『誹風柳多留』1巻 p.26 所収）。
- 46) 水野稔編 1993 『山東京伝全集』ペリかん社 2巻 p.374
- 47) 伊藤勝 1978 『葛飾北斎小説集』北星出版社 p.132
- 48) 高木元により「二〇〇〇年に入ると、化物をモチーフとした黄表紙に注目があつまった。」と指摘があるように、アダム・カバットをはじめ、黄表紙の化物について多

- 数の出版がなされている（高木元 2006「草双紙を研究すること」『江戸文学』35号（<http://www.fumi-kura.net/index.php> 最終閲覧日 2015.11.6）参照）。
- 49) 図版は早稲田大学所蔵本（古典籍総合データベース掲載 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/> 最終閲覧 2015.11.8）を用い、翻刻は水野稔編・1993 正博校訂『山東京伝全集』第 2 巻を参考にした。
- 50) 山の芋、長芋、唐の芋、^{かじょういも}何首烏芋、薩摩芋、小芋、つくね芋、^{きぬかづき}衣被の芋、里芋、親芋、石芋、蓮芋の 12 種類が登場する。本作の解説をした塚谷裕一は、登場する芋の品種の多さについて触れている（塚谷裕一 1998「京伝芋づくし」『学鏡』95（3）pp.34-37）。なお、アダム・カバットは、本作を漫画風に口語訳し、黄表紙の面白さを紹介している（アダム・カバット監修 2014『芋地獄』江戸マンガ①小学館）。
- 51) 大小合わせて 136 の地獄があるといい、時代は下るが、川柳では百三十六の数を三十六と略し「五十四の罪で三十六へ落ち」（天保 4（1833）年 123 別 4 篇）と詠んでいる（岡田甫 1978『誹風柳多留全集』9 巻 三省堂所収、石川一郎 1989『江戸文学俗信辞典』東京堂出版参照）
- 52) 小林朝比奈は剛勇で知られた鎌倉前期の武将朝比奈義秀を指しており、鳥巡りや地獄巡りといった説話から江戸時代に歌舞伎や狂言などの役柄で登場する人物である（古井戸秀夫編 2010『歌舞伎登場人物事典』白水社参照）。
- 53) 註 26 参照
- 54) 正徳 2（1712）年自序の事典『和漢三才図会』（寺島良安著）巻第 51「^{なまこ}章魚」の項に、「蛸性芋ヲ好ム。田圃ニ入り芋ヲ掘テ食フ。共行クヤ也。目ヲ怒シハ足ヲ踏テ立行ス。（原漢文）」とある。なお、手本とされた 1607 年成立（明代）の『三才図会』（王圻編）に蛸の項目はなく日本独自の俗信とみられる。（図版は国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/> 最終閲覧日 2015/11/24 参照）
- 55) 図版は CD 復刻シリーズ『国立国会図書館黄表紙集』10 巻 フジミ書房を用い、翻刻は、植木智広 2010「黄表紙『蛸入道佃沖』翻刻と注釈」『国学院大学近世文学学会会報』16 pp.86-93 を参照した。
- 56) 天明 6(1786)年自序『譬喩尽』（松葉軒東井編／8 冊）には「芋の煮えたも知らぬ奴」（宗政五十緒 1979『譬喩尽並ニ古語名数』同朋舎 p.27 所収）、19 世紀前半に成立の辞書『俚諺集覧』（太田全齋編／26 冊）には「芋の煮たも知らぬ」（井上頼閑、近藤瓶城増補 1899-1900『俚言集覧』（太田全齋著）上巻 近藤活版所 253 頁所収）とある。
- 57) 「堀井丁うちわと見せてさつまいも」（天明 2（1782）年十七篇）、「夏しぶく冬あまくなる堀江丁」（天明 3（1783）年十八篇）とあるように、洪団扇の洪の文字と薩摩芋の甘味を捉え、堀江町を表現した川柳がある。堀井は江の誤記とみられる（山澤英雄校訂 1995『誹風柳多留』岩波書店所収、三浜田義一郎監修 1973『江戸文学地名辞典』東京堂出版 p.723 参照）。
- 58) 嘉永 6 年（1853）成立の風俗志『守貞謾稿』（喜田川守貞著）巻之六に、江戸の焼き芋が番太郎と呼ばれた番小屋で売られたとある（宇佐美英機校訂 1996『近世風俗

- 志』(喜田川守貞著『守貞謄稿』)全5巻 岩波書店所収)。
- 59) 石川一郎編 1989『江戸文学俗信辞典』東京堂出版 pp.145-146
- 60) 川柳に「暑いこと蛇籠の中へ芋を入れ」(文化2(1805)年31篇)とあり、土用の頃に新芋が採れるため、暑中見舞いに用いられたという(渡辺信一郎1996『江戸川柳飲食事典』東京堂出版 p.170 参照)。
- 61) 川柳に「三途川女追剥出るところ」(天保2(1831)年 梅柳二編)とあり、三途の川の地獄で服を脱がされるとされた(石川一郎編1989『江戸文学俗信辞典』東京堂出版 pp.154-155 参照)
- 62) 石川一郎編 1989『江戸文学俗信辞典』東京堂出版 pp.306-308
- 63) 弘法大師がある集落で芋を求めるたが、石であるともうることができず、その後その地域の芋は食べられないほど固くなってしまったという伝説(石川一郎編1989『江戸文学俗信辞典』東京堂出版 pp.16-17 参照)。
- 64) 天明6年(1786)自序『譬喩尽』(松葉軒東井編)にみえる(宗政五十緒1979『譬喩尽並ニ古語名数』同朋舎 p.377 参照)。
- 65) この他に、名前に芋が入る作者「堀田芋助」の作品が確認できる。疱瘡絵本の類いとみられる寛政5(1793)年刊行の黄表紙『十二神楽稚軽業』(堀田芋助作・北尾重政画か/3巻3冊15丁)、「畑之土人真芋介」とも名乗る寛政5(1793)年刊行の黄表紙『紺丹手織稿』(北尾重政画か/3巻3冊15丁)の2点である。閏歴未詳の人物とされ(市古貞次監修1998『国書人名事典』4巻 岩波書店)、筆名に芋の滑稽さを当て込んだものと推測できるが、「自らを名前で謙遜しながらも素養の確かさが作品から窺える、かなり知られた人物」と評される(棚橋正博1989『黄表紙総覧』中巻 青裳堂書店 p.366)。作品ではないが、黄表紙と芋に関連した存在として触れておく。
- 66) 尽くしものの黄表紙の一例として、本尽くしの天明2(1782)年刊行『<手前勝手>御存商売物』(山東京伝 作・画)、化物尽くしの天明6(1786)年刊行『化物一代記』(伊庭可笑作、鳥居清長画)、流行語尽くしの安永7(1778)年刊行『辞闘戦新根』(恋川春町作画)がある。

<ABSTRACT>

***Kibyōshi* about Potatoes: the Use of the Funny Image**

FUJITA Tomoko

This paper deals with illustrated storybooks with yellow covers called *kibyōshi*, which were published in Edo from the late 18th century to the beginning of the 19th century. In *kibyōshi* there were many expressions relating to the various kinds of potatoes that were daily food, such as *sato-imo*, *yamano-imo*, *naga-mo* and *satsuma-imo* (sweet potato). In particular, the *kibyōshi* which included the word *imo* (potato) in their titles or stories were 40. From their analysis emerged 4 patterns of the funny image of potatoes, which are discussed in the following sections, focusing on a representative title each.

Section 1: Characters named with the word *imo* (potato) and the relation with farts: *Imotarō henikki banashi* 芋太郎屁日記咄 (“Imotarō’s Diary of Farts”) by Koikawa Harumachi (1778).

Section 2: Funny expressions to come from the association of women and *satsuma imo*: *Goningiri suika no tachiuri* 五人切西瓜斬売 (“The Cutting of Five Slices of Watermelon”) by Santō Kyōden (1804).

Section 3: A folk belief about a *yama no imo* turning into an eel: *Imo no yononaka* 芋世中 (“It’s a Potato’s World”) by Naishin Ko (1789).

Section 4: The large variety of potatoes, and a folk belief concerning a potato and an octopus: *Ippyaku sanjyō imo jigoku* 一百三升芋地獄 (“103 Kilos of Potatoes’ Hell”) by Santō Kyōden (1789).

This paper shows how plentiful and varied were the expressions relating to potatoes in *kibyōshi*, and therefore how wide and complex the funny image of potatoes was at the time. Expressions about potatoes in *kibyōshi* cover aspects such as the cultivation and the variety of botanical species,

their diffusion and commerce, the folk believes and proverbs about potatoes, the connection to annual events and their taste and role as food. Moreover, this paper clarifies how the variety and humorous elements of the image of potatoes suited the literary form of the *kibyōshi* better than other vegetables, and was therefore widely used by *kibyōshi* authors, to the extent that it is possible to identify the sub-stream of “*kibyōshi* about potatoes”.